

〈創作〉

狂言風オペラ “フィガロの結婚”

Kyogen style opera “Le nozze di Figaro”

片山 剛¹

要旨

本稿は論文ではなく、2018年3月に初演された狂言風オペラ『フィガロの結婚』の草稿脚本である。実際に上演されたものは藤田六郎兵衛氏が加筆されたもので、登場人物名も異なり、かなり趣は変わっている。筆者はもともと浄瑠璃（義太夫節）の部分のみを担当する予定であったが、急遽全体を書くことになった。しかし、どうしても浄瑠璃主体になってしまったために狂言の色、あるいは喜劇的要素を濃くするために上演台本では加筆されたものが用いられたのである。

キーワード：能楽，狂言，文楽，オペラ，管楽合奏

No-gaku, Kyogen, Bunraku, Opera, Wind ensemble

はじめに

本稿は、2018年3月、2019年3月に上演された狂言風オペラ「フィガロの結婚」の原脚本である。本来は能楽笛方の藤田六郎兵衛氏が担当されるはずであったが、藤田氏の都合によって筆者が草稿を作り、それをもとに藤田氏が加筆して最終的な脚本とすることになった。ここに公開するのはその草稿である。

芸術監督は大槻文蔵（能シテ方）、演出は藤田六郎兵衛、初演の出演者は、赤松禎友（能シテ方）、茂山あきら、野村又三郎、茂山茂、山本善之（以上狂言）、豊竹呂太夫、鶴澤友之助、桐竹勘十郎、吉田襲紫郎、桐竹勘介（以上文楽）の各氏、管楽合奏はスイスのクラングアート アンサンブルであった。

脚本

とき 平安時代のように江戸時代のように、どこか現代のような、ある春の一日

ところ 京の都

登場人物

在原平平（ありはらのひらひら）

北の方 橋の上（たちばなのうえ）

隨身 家路（いえみち）

女房 梅が枝（うめがえ）

小舎人童 光丸（みつまる）

樋洗童 春菜（はるな）

【第一幕】

在原平平の屋敷内、梅が枝（女房）の局および寢殿の母屋、橋の上の居所

能舞台後座にアンサンブル（以下「オケ」と表記）の、地謡座に太夫、三味線、笛の準備が整っている。

オケ、橋掛りより、後座の定位置に着席、太夫、三味線、笛、切戸口より地謡座に着く。

（第一場）梅が枝の局

オケ Ouverture演奏。

終わると、三味線ソナエで太夫の語り

義太夫 それ少年の春は惜しむともとまらぬものというなれば、むべこそ生きとし生けるもの、あやめも知らぬ恋ぞする。いとしき人の憂きさだめ、よきものたれとひたすらに願うを愛というならば、そのあやまちのさがなきを赦すもまたぞ愛なりける。

三味線 二重唱Cinque…dieci の1～3小節3拍目まで弾く

オケ 二重唱 Cinque…dieci の3小節アウフタク

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2022年9月2日

トから演奏

梅が枝登場。橋掛り（舞台下手）で立ち止まり、首を傾げながら

梅が枝 一体、何があったのやら。私と家路様の結婚もつつがのうこと運び、晴れて今宵は三日夜のお祝い。その用意のために里に下がっていたところ、すぐに参れとお呼び出し。はて、何の御用かしらん。

（第二場）

梅が枝、舞台（梅が枝の局）に入る。着物をたたんだりしている。家路、登場。局を覗いて、中に入りながら、嬉しそうに

家路 梅が枝、来ていたのか。

梅が枝 家路様。

家路 いや、相変わらず美しい。そなたのような花嫁持つはこの家路の大きな果報。どうじゃ、幸いあたりには誰もおらぬ。ちと口など吸わせてくれぬか。

梅が枝（家路の手をはたいて）朝っぱらからたわけたことを。それよりも、三日夜のしたくであわただしい日に、にわかのお召しがございましたが、いったい、なにごとでございましょう。

家路 さあ、それこそはお殿様の温かいおぼしめし。われらの祝いを今宵このお屋敷で盛大になさってくださいな。

梅が枝 このお屋敷で？

家路 うむ、なんとありがたいことではないか。

梅が枝（あきれて）あほ。

家路 あほ？ そなた夫に向こうで、それはなからう。

梅が枝 いいえ。あなたのお人よしにはあきれるばかり。今のお話で、私はたちどころにお殿様のたくらみを呑み込みました。

家路 というと？

梅が枝 三日夜の祝いを口実に、下戸のあなたをしたたか酔わせて、その隙に女遊びの悪い癖。

家路 そんなことならわかっている。橋の上様にはお気の毒じゃが、殿の火遊びは病も同然。今宵ばかりは我らは我ら。酒に弱いが幸いと知らぬ顔の半兵衛じゃ。

梅が枝 その相手が誰であろうと？

家路 うん？

梅が枝 まだ気がつきませぬか。お殿様のめざす相手の女子とは、あなたの許嫁殿。

家路 え？（自分を指さし、梅が枝を指さし、やっと気が付いたという風に）そりゃー大事。

梅が枝 もう、あなた様は仕事こそおできになりますが、色恋の道には鈍すぎます。お殿様はあれほど美しい奥様がありながら、このところお屋敷中の若い娘に声をかけ、私までがそのお情けにあずかろうという情けなさ。

家路 そうか、そういえば、近く殿は豊前の宇佐八幡宮までお使いに出られるそうじゃが、わしはそのお供を命ぜられ、『梅が枝も連れてくるがよい』とおっしゃっていた。それも定めて・・・

梅が枝 そうですとも。

家路 うむ・・・おっと、大事の御用を忘れるところであった。これから三条高倉までひとつ走り。しかし・・・なんとか殿にいっぱい食わせたものじゃな。

オケ Se vuol ballare 演奏

家路、梅が枝となおもいくらか話したあと退場。

梅が枝は憂鬱そうに見送る。

（第三場）

光丸と春菜、客席（見所）から登場。光丸は困惑したような表情で、春菜はあつけらかんとして。光丸 梅が枝様。（階の下まで来て、息を切らせて）梅が枝様。

梅が枝 光丸、と・・・春菜じゃないか。

春菜（関東アクセントで、軽く、明るく）こんちわ～。

光丸（憂鬱そうに）実は、聞いていただきたいことがあるんです。

梅が枝 そう。ま、上がりなさい。

光丸 ごめんなさいませ。

春菜 おじゃましま～す。

光丸と春菜、階から上がる。

光丸 梅が枝様。（うっとりとして、小声で）いつもお美しいですね。（咳払いして声を戻して）実は昨日、春菜と二人で、その、いたずらごとをしているところをお殿様に見つかりまして・・・。あのとおり、自分に優しく他人に厳しい方ですから、『おまえのようなふしだら者は無用じゃ』とお咎めを受けました。このままではお屋敷を追い出されます。そんなことになったら（小声で）梅が枝様とも（声を戻し）もう会えなくなります。

梅が枝 会えなくなる？ なるほど、あなたが好きで好きでたまらない、橘（たちばな）・・・

春菜（「好きで好きで・・・」という言葉聞いて自分のことだと思っていたので）え？ たちばな？

光丸 た、た、たちばな・・・し（立ち話）など

している場合じゃないぞ、春菜。今あちらでどなたかが樋洗の御用をおっしゃっている。

春菜 え、ほんと？

光丸 ほんま、ほんま。あとはこの僕に任せて、早う行け。

春菜 そう？ それじゃ、あたし、行きますので。あとは、ヨ・ロ・シ・ク。

春菜、退場。

光丸 もう、春菜の前で変なこと言わないでくださいよ。

梅が枝 ごめんなさい。でも、あなたはほんとうに懂れてるんでしょ、橘の上様に。

光丸 ああ、言わないで。そのかぐわしいお名前を聞いただけで、僕の心は、ゆらりゆらゆら由良の門の行方も知らず揺れ迷う。(自分の世界に浸りきって) 湖に浮かぶ小舟か、ろうそくの灯か。はたまた冬の晴れ間の風花か。橘様だけではない。女という女がすべて僕の心を狂わせる。恋！恋！恋という言葉聞くだけで、僕はおののき、震えるばかり。夢の中でも、目覚めても、僕は語る、恋というものを……。

梅が枝 (冷めた声で) 大丈夫？

光丸 (我に返って) たぶん……。それにしても梅が枝様。あのうさんくさいお殿様がどうして奥方様のようなうるわしい方と結ばれたのでございましょう。

平平、姿を見せ、きよろきよろしている。梅が枝が次の噂話をしている途中からくしゃみをしそうな様子

梅が枝 そうよね、それはこの世の七不思議。在五中将業平様の子孫、とやらおっしゃっても、(指折り数えるように) 風采は上がらず、和歌は詠めず、みやびの心のかけらもない……

平平 ハクション！

光丸 (驚いて) お殿様！(外を見て) こちらに來られる。

梅が枝 (うろたえて) そなた、こんなところにいるのを見つかっては……。そ、その、几帳の後ろに、早く、早く。

(第四場)

梅が枝、光丸を押しやるように几帳の後ろに入れ、さりげないふりをしようとするが、なおも落ち着かない。平平、局に入ってくる。

平平 (猫なで声で) 梅が枝や。(不思議な様子で) どうした、何をうろたえておる。

梅が枝 いえ、あの、お殿様がこのようなところ

においでになつては……。人目もございますゆえ。

平平 わしがわしの屋敷のどこにしようと、とやかくいわれることはない。それよりな、ちょっと、わしの話聞いてくれ。まあまあ、下にいや、下にいや。わしは来月、宇佐八幡宮に使いに出る。そのときにはな、家路も連れていく。むろんそなたも一緒じゃ。そしてな、三日に一度は家路をさきがけさせて、その留守はわしがそなたの守り神。旅のつらさをいやそうと、手に手をしめて抱き合う。肌はすべすべ白梅の露もしたたるよい香り。イヒヒ、アハハ、ヒヒヒ、ハハハ、ハハハ。あとは極楽、太平楽。あれわいさ、これわいさ、どっこいせのせ。ハハハハハ。どうじゃ、その手始めに今宵の宴。そのどさくさに半時ばかり。そういやがるな。わしは主人、そなたは女房。どっちが偉いか、わかっておるな。わしにはわしの立場がな……。

家路 (舞台裏で) 橘の上様へのお届け物。さらば私が梅が枝に預けておきます。

梅が枝 (狼狽して) 家路さまでございます。

平平 あいつめ、もう戻りおったか。やや、こっちへ来る。どこか隠れるところはないか。おお、あの几帳の後ろに。

梅が枝 いえ、なりませぬ。

平平 なるもならぬもあるものか。どけと言うたらどかぬか。

義太夫 と、言うより早く几帳の内、入れば光丸抜け出ずる。心得たりと梅が枝は、ありあう衣ひっかぶせ、息を詰めてぞいたりける。

平平、梅が枝を突き飛ばして几帳の後ろに入る。同時に光丸が反対側から出て、そばにあった着物を梅が枝が取り上げ、几帳の前に出てきた光丸にかぶせ、光丸はまた几帳のそばでそれをかぶったままうづくまる。

(第五場)

家路 梅が枝、いるか。

梅が枝 (あわてて) はいはい。

家路 これはなにやら唐物の香り油とやら。奥方様に届けてくれ。

梅が枝 それは何ともおやすい御用。(受け取って) さ、あなたは早くお仕事に。

家路 なんじゃな、先ほどの話もしたいと思うておったのに、そう無愛想に追い返すこともあるまい。なるほど、女房の局に気安く男が入りするのはご法度ではあるが、小舎人の光丸など、心もそらにこのあたりを勝手気ままにうろついてい

るではないか。

梅が枝 また、そんなでたらめを。

家路 いや、このあたりならまだよいが、あのこせがれめ、近ごろは奥方様のお部屋のあたり・・

梅が枝 (平平を気にしながら) もう、いいかげんになさいませ。

平平はときどき几帳の上から顔をのぞかせる

家路 ものはついでじゃ、聞くがよい。花から花への揚羽蝶、去年の野分の大風で寝殿近くに詰めていたとき、風にあおられ巻き上がる簾の裾のすきまからちらと見えたは奥方様。その美しさに目をみはり、思い初めたが恋のわな。お屋敷中の誰一人、知らぬ者としてない話。

平平 (姿を現して) わしは知らぬぞ。

家路は仰天する。梅が枝は落胆の様子。光丸はそっと几帳の後ろに入る。

(第六場)

家路 殿・・。

平平 家路。今の話は誠か。

家路 いえ、おそらく、たぶん、まちがいなくわたくしの聞き違いで。

梅が枝 そうですとも。よしんばそれが誠でも、光丸のような子どものこと、お気になさるまでもございません。

平平 なるほど、見かけはまだ子ども。したが、中味はそうとも限るまい。あいつは女と見たら誰彼なしに手も足も出す生意気盛り。昨日も屋敷の丑寅の蔵に行ったら、中のごそごそ音がする。ハテ面妖な、と思うて入ってみると、樋洗童の春菜めが着物を乱して潜んでおった。さてはと思うて見回すと、ちょうど、こ、こ、このような几帳があって、その帷子が揺れている。そっと近づき手をかけてそれをめくると光丸めが・・(うずくまっている光丸に気づき)・・いた・・。

光丸、おどおどしながら出てきて隅にいる。

(第七場)

平平 見たか、家路。女はみんなこうしたもの。三日夜の宴の昼日中、若い男を引きずりこんで、何をするやら知れぬもの。(梅が枝は「違う、違う」というそぶり。家路は「わかっている」という合図) やい。きさま、いつからそこにいた。

光丸 たったいま・・。

平平 嘘を言うな。

光丸 ほんの少し前に。

平平 そんならさだめて最前からの話、聞いたな。

光丸 いえ。

平平 聞きおったな。

光丸 何にも。

平平 聞いたであろう。

光丸 存じませぬ。

平平 (わずかに間があつて) あれわいさ、これわいさ

光丸 (つられて) どっこいせのせ。

平平 聞いとるではないか!

オケ *Giovani liete* 演奏

演奏の間、人々はそれぞれの思いを表現する。途中で音楽に気づき、下手を見る。

(第八場)

平平 あれは何の騒ぎじゃ。

家路 屋敷の者が音楽を奏でて、お殿様の徳の高さをたたえております。ですからどうぞ光丸にもお赦しを。

平平 ならぬ。

光丸 お赦してください。

平平 ならぬわい。

梅が枝 お心やさしいお殿様。わたくしに免じてお赦しを。

平平 ふん、そなたがそこまで言うなら赦してやろう。が、ちょうど播磨の莊園の出納が病で都に戻ってきた。代わりにおのれを任ずるからは、今すぐ旅立て。つべこべ言うとはだではおかぬ。

義太夫 と、にべもしゃしゃりも泣き伏す光丸。

家路、駆け寄り肩を抱き、声高らかに、

家路 さあさあ、播磨の出納殿。何にも案ずることはない。お殿様のお情けと夢と希望を心に抱いて、山崎街道突っ走れ。

オケ *Non più andrai* 演奏

光丸は悲しみにくれている。家路が盛んにそれを励ます。平平はその様子を見て皮肉な笑いととも退場。家路が光丸を連れて退場。梅が枝は香油の瓶を持って橋の上のいる寝殿に行く体で退場。

(第九場)

在原平平の屋敷内、寝殿の橋の上の居所。

笛 愛と赦しの旋律 演奏

橋の上登場。

橋の上 げにや、忘らるる宇治の中橋、中絶えて、今ぞ知らるるわが夫の情けは失せて年ぞ経る。

義太夫 春霞立つを見捨ててゆく雁のいや遠ざかるわが身こそ悲しきものはなかりけれ。

橋の上 いざこのうえはうきながら消ぬる泡ともなりななむ。

義太夫 消ぬる泡こそゆゆしけれ、せめてつきせぬため息を癒したまへや、神仏。

義太夫の途中、梅が枝が香油の瓶を捧げ持ちながら登場。部屋に入ると芳香があり、梅が枝はその香りにうっとりする。しかし橘の上の憂いに気づき、あえて気を強く持とうとする。

(第十場)

梅が枝 奥方様、今日はまたよい香りでございます。白檀、沈香、丁子に薫陸。奥方様のお手にかかるといっそう香りが引き立ちます。近頃はまた唐天竺のかなたから花の精までお取り寄せ。今日もただいまこのように香油が届きましてございます。

梅が枝が香油瓶を渡す。橘の上がふたを開け、香りを聞く。

梅が枝 それは何という花の油でございますか？

橘の上 これこそはラーヘンデルと名に高き、若紫の花なるぞ。

梅が枝 ラーヘンデル、でございますか。(瓶を受け取り、深く香りを吸って) なんとふくよかな香りでございましょう。が、ここに書いてございませぬ「花言葉」というのもようございませぬ。

橘の上 よう気づいたり、梅が枝。その言葉こそわらわの思い。

梅が枝 (花言葉を読み、頷いて) さすがは奥方様でございます。それに引きかえ、このお屋敷の男たちときたら……。恋に恋する若男、色恋の道に疎いわが夫、こんなに美しい奥様をお持ちになりながら、火遊び三昧のお殿様。

橘の上 (哀しみつつ) 五月待つ花橘の香にも似て、我は昔の人なりや。

(第十一場)

橘の上と梅が枝は調香について話している様子。

家路、光丸を連れて出てくる。光丸は妻戸の外に控えておどおどしている。

家路 殿の隨身、家路にございます。

梅が枝 (橘の上に目で許しを得て) お入りください。

家路 奥方様。ごきげんうるわしう、恐悦至極に存じます。ときに、お殿様の色好みにつきましては奥方様のみならず、このお屋敷中の悩み。そして今宵は、この梅が枝にまでお手を出そうとの思し召し。そこでわたくし、一計を案じましたれば、奥方様のお力をお借りしたいのでございませぬ。委細はここに書き記しました。

家路が梅が枝に手紙を預け、梅が枝はそれを橘

の上に渡す。橘の上、読む。

家路 さて、もうひとつの願いは、これより播磨に落ちまする、あわれな小犬へのお目通り。

家路、光丸に合図する。光丸、おどおどしながら入り、橘の上の前に押し出される。橘の上、先ほどの手紙を梅が枝に返す。

(第十二場)

光丸 橘の上さま。小舎人童の光丸と申します。このたびお殿様のお怒りに触れ、このままでは、お屋敷を出なければなりません。何とぞおとりなさいませ。さもないとわたくしは、もう、どなた様とも会えなくなります。

梅が枝 お美しい奥方様とも……。

光丸 ほんとうに、お美しい。(橘の上を見つめ、自分の世界に浸って) 奥方様、恋とは何でございましょう。

梅が枝 (独白) また始まった。

光丸 今、この僕の胸にたゆたう、もやもやとした波風が恋なのか。

オケ Voi che sa pete 演奏

光丸、橘の上に近い、恋心を訴える様子。家路と梅が枝はそれを眺めている。橘の上は、最初は無反応だが、次第に光丸の心に打たれ、その手を取る。

橘の上 老いも若きも身に背負う恋の重荷のわりなさよ。して、その恋というものは、

光丸 ときに喜び

橘の上 ときに苦しみ

光丸 凍るは肝か

橘の上 燃ゆるは思ひ(「ひ」と発音する)

光丸 つくはためいき

橘の上 もるるは嘆き

光丸 胸は高鳴り

橘の上 思いは震え

義太夫 落ち着く間とてなけれども、その悩みすらなつかしき。不思議ならずや、恋心。

梅が枝が咳払いをすると、光丸、橘の上は我に返り、離れる。

橘の上 これこれ梅が枝。もう八つ時。西の廂の厨子棚になんぞの菓子が置いてある。ひとつ光丸に持って参らぬか。

梅が枝 はい、それではすぐに。

家路 ではわたくしもこれにて。

(第十三場)

梅が枝と家路、寢殿を出たところで。

梅が枝 それではあなたの工夫の通りに。それに

しても、人は力を持つとどうして身勝手になるのでしょうか。

家路 権力を持つ者はな、その力の半分を自らの欲望のために奮うもの。

梅が枝 あとの半分は？

家路 おのれの過ちを隠すために使うのじゃ。

梅が枝、家路、退場。

(第十四場)

橋の上 のう光丸、心たしかに持つがよい。そもそも殿のお怒りとは。いかなることか言うてみや。

平平、次の光丸のせりふの途中に姿を見せ、くしゃみをしそうな様子

光丸 はい、わたくしのちょっとした粗相から、お殿様のお叱りを受け、そのことで梅が枝様におとりなしを願おうと、今朝がたお局にうかがいました。そのとき、お殿様のお噂をしておりましたら、

平平 ハクション

光丸 あのようにくしゃみをなさいますて・・・。(驚いて) お殿様！ 奥方様、いかがいたしましょう。(塗籠の戸を見つけて) あの中に入ります。なにとぞ、よしなに。

光丸、塗籠に入る。平平、入ってくる。

(第十五場)

平平 橋の上。(橋の上がうろたえている様子を見て) いかがなされた。ふん、まあよい。そなたに聞きたいことがある。屋敷中の者が近頃そなたの周りに若い男がうろついていると言うておる。何ぞ身に覚えはないか。

橋の上 ゆめゆめ、さようのことは・・・。

平平 ない、と申すか。そうであろう。そうでなければ赦されるものではない。

塗籠でガタンと音がする

平平 なんじゃ、今の音は。

橋の上 わらわはなにも・・・

平平 聞こえぬというか。誰かおるな。何者じゃ。

橋の上 あの、梅が枝が。

平平 梅が枝か。そんならそなた、なぜそのようにうろたえる。

橋の上 梅が枝にうろたえたまうは殿にこそ。

平平 そのように罪をなすりつけるのは塗籠を開けてからにするがよい。

梅が枝登場。様子をうかがって部屋の隅に潜む。

平平 (塗籠に向かって) そこにいるのは誰じゃ。さっさと出てこい。(戸を開けようとして) やあ、中から錠を鎖しておる。ますます怪しい。

橋の上 いやなに、ただいま梅が枝が今宵の装束

をこころみております。

平平 そんな言い訳が通ると思うか。出てこい、出てこぬか。むう、かくなる上は力づく。なんぞ道具を取りに行く。(去ろうとして立ち止まり)おっと、小細工されてはかいもない。橋の上、そなたも来られよ。

橋の上 (平平を無視するように) 参りまする。

橋の上、退場。平平、あとに続こうとしてふと思いつき、扇を取り出して塗籠の戸の下に立て掛け、うなずいてから退場。

(第十六場)

梅が枝、姿を見せ、扇をそっと取り、それが意味するところを確認したうえで、

梅が枝 光丸、開けなさい。私です、梅が枝です。

戸が開いて光丸が出てくる。

梅が枝 お殿様はすぐ戻られる。早く逃げて。私が代わりに塗籠に入ります。

光丸 梅が枝様、愛しています。

梅が枝、ふざけている場合ではないという表情。

オケ Aprite presto 演奏

光丸が階から飛び降りようとすると、梅が枝が押しとどめ、扇を渡して戸に立て掛けるように指示する。梅が枝が塗籠に入る。光丸は、言われた通り扇を置いて階から飛び降り、客席(見所)を通って退場。

(第十七場)

平平、手にのこぎりなどを持って怒りながら登場。橋の上もしおしおと登場。平平、扇がさきほどのとおりになっていることを確認してそれを取る。

平平 よし、最前と何にも違うてはおらぬ。さあ、中にいるのは梅が枝か。そんならためらうこともあるまい。手荒なことをさせずとも、いますぐここに出てまいれ。

橋の上 あならうがはしや、平平殿。壁にも耳はあるものを。

平平 そんならこの壁の向こうには、さぞよい男が聞いていよう。白状すれば咎めは軽い。言わねばそなたとの縁も今日限り。どうじゃ、どうじゃ。義太夫 と居丈高。責め立てられて橋は玉の汗なすたなごころ。心は早鐘、鬱々と、うち惑いてぞいたりける。平平なおも詰め寄って、

平平 さあさあ橋の上。もはや言い訳は無用じゃ。中にいるのは何者ぞ。

橋の上 さあ、それは。

平平 さあ、さあ、さあ・・・。

橋の上 小舎人童。

平平 またあいつか。(のこぎりを足の上に落として) あ、痛っ！ ちえええ、あのこせがれには播磨へ立てと言いいいたに、なにをぐずぐずしておるぞ。(戸を叩いて) やい、光丸。今すぐ出おれ。この平平が成敗してやる。四の五の言わず、出てまいれ。

義太夫 と、嫉妬に狂い顔赤らめ、わめき散らせば、塗籠の内より出づるあで姿。出鼻くじかれ、のける平平。

(第十八場)

戸が開いて梅が枝が出てくる。橋は驚きつつも安堵の様子。平平は仰天する。

平平 やあ、う、梅が枝。いや、そんなはずはない、中を改めるまで油断はならぬ。

平平、塗籠に入り、中を調べる。

梅が枝 (橋の上に) ご心配には及びませぬ。光丸は逃がしました。

平平、がっかりして出てくる。

平平 わしの思い違いであったか。しかし橋の上。夫の心をもてあそぶとは、悪ふざけが過ぎるぞよ。

橋の上 あまりに強いお疑い。その悲しさをつつみかねての戯れごと。

平平 わかった、もうよい。ここはひとたび、仲直りじゃ。

義太夫 と、心に残るいぶかしさ、押しつつみてぞ立ち出する。

平平、不満げに退場。

(第十九場)

梅が枝 危ういところでございました。さあ、もう夕暮れも近いころ。もはや猶予はなりませぬ。さきほどの家路様のお手紙のように。

橋の上 のうのう梅が枝、いかに苦しき世なりとも、かかることまでするものか。

梅が枝 愛すればこそ責めねばならぬこともございます。祈りと戦いは、愛の二つの働きではございませぬか。

オケ Sull'aria 演奏

梅が枝、紙と筆を用意し、橋の上が言うとおりに字を書く様子を見せる。出来上がったことを確認して、それを持って退場しようとする橋の上が制止し、梅の枝を渡し、何やらささやく。頷いた梅が枝が去り、橋の上もしずしずと退場する。

演奏後、オケ、太夫、三味線、笛退場。

【第二幕】 在原平平の居室、橋の上の居室、庭オケ、太夫、三味線、笛入場し、それぞれの位置に着く。

(第一場) 在原平平の居室

義太夫 昔、男、わがものにせむと思う女のありけれど、あだなる心、見透かされ、つれなさまるを恨みつつ「ついに寄る瀬はあり」と詠む。(平平登場。いらいらしている) それは業平、これなるは似ても似つかぬ在原の平平。

平平 まったくもって、わけがわからぬ。(梅が枝、登場。手には梅の枝と手紙。平平の様子をうかがっている) あの塗籠の戸口はひとつ。証拠に置いた扇はそのまま。中に居たのは男のはずが、現れ出たのは梅が枝。いや、それよりも橋の上の機嫌を損ね、わしの誉れは傷ついた。何より腹の立つことは、わしがこうしてため息をついているのに、隨身ごときがあの梅が枝を手にする事。

(第二場)

梅が枝 お殿様。

平平 なんじゃ、梅が枝か。

梅が枝 まだお怒りでございますか。

平平 いや、怒ってなどはおらぬ。ふてくされておるだけじゃ。

梅が枝 あれほど美しい奥方様がいらっしゃいますのに、ほかの女子にお心を移しすぎではございませぬか。

平平 そなたの説教、聞きともない。なるほど美しい女ではあろうが、あの顔はどうも能面のようでいかん。して、何ぞ用か。

梅が枝 はい、奥方様が気分すぐれず、もしやお殿様が呵梨勒丸をお持ちではないかと。

平平 それなら東の対の硯箱に入れてある。勝手に持って行くがよい。

梅が枝 承知いたしました。(間) あの・・・。

平平 何じゃな。

梅が枝 お殿様のそのお怒り、いえ、そのおふてくされを鎮めるためにわたくしにできることはございませぬか。

平平 ふん！ そりゃ・・・そなたがわしの言うことをきいてくれればな・・・。

梅が枝 (思わせぶりに) お殿様の仰せに従うのは女房のつとめでございます。

平平 ん？ (間) それは、ひょっとして・・・。

梅が枝 女は「はい」というのに時間のかかるもの・・・。

義太夫 と言われて、平平、顔振り上げ、(以下、「城

木屋」のお駒のクドキのパロディ)

平平 そりゃ聞こえませぬ、梅が枝さん。お前とわしがその仲は昨日や今日のことかいな。屋敷に勤めたその日から、ふっと見初めて恥かしい。恋のいろはをたもとから、そっとわしが心では、天神様へ願かけて、梅を一生頼んだぞ。そのおかげやら嬉しい返事。今宵のことを知らせまし、問い談合もせうものと、待ちかねていたものを。あんまり嬉しい、かたじけない。どうぞたんのうさせてたべ」

義太夫 と、女の膝にすがりつき、憚りもせぬうれし泣き。真実見えてぞいやらしき。

平平は梅が枝に抱きついて頬ずりしたりするが、適当なところで梅が枝はそっと平平を押しつける。

梅が枝 さあさあ、お殿様。お楽しみはまたあとで。

平平 おお、そうであった。呵梨勒丸の御用じゃな。

梅が枝 いえ、あれはお殿様とお話するための言い訳で。

平平 かわいい奴！ して、今宵の待ち合わせは。

梅が枝 これに書いてございます。

梅が枝、手紙と梅の枝を渡す。

平平 (領いて受け取って) よしよし。必ず約束違えるな。ああ、これこれ。これは当座の化粧代(お金を渡す)。

梅が枝 (受け取って) ではまた、そのときに。

平平 うむ。足もとに気をつけてな。

梅が枝、一礼してその場を去る。

平平 (投げキスなどして) 約束じゃぞ、契約じゃぞ。

(第三場)

平平 思い知ったか、家路め。やっぱり男は身分と金。(手紙を開いて) さて、何と書いてあるかな・・・。え～なにに。『梅の香に身をつつみかねいつしかと君まつの木の下ぞゆかしき』。なんじゃこりゃ。まったく、女はすぐに和歌で返事する。これでは埒があかぬわい。

義太夫 と、思案投げ首するところへ。御用済ませし樋洗、春菜。

春菜登場、忍び足で平平に近づく。

(第四場)

春菜 (驚かすように早口で) お殿様。

平平 ああ、びっくりした。なんじゃ、春菜か。

春菜 そんな深刻な顔して、どうかしちゃったの。

平平 ええ、うるさい。あっちへいっておれ。

春菜 何を読んでるのかなあ？

平平 これはな、そなたのような子どもにはわからんものじゃ。

春菜、覗き込む

春菜 ははあ。それって、和歌じゃないですか。ちょっと拝見 (とって取り上げる)。なるほど、ふん、ふん。そういうこと。(そっけなく) はい、お返しします。じゃあ、またね (返してその場を去ろうとする)。

平平 あ、これこれ、ちょっと待て。ちょっと待たんかい。そなた、何が書いてあるか、もうわかったのか。

春菜 そりゃお殿様。よっつっほどの野暮でないかぎり、これくらいのことは簡単にわかっちゃいますわよ。

平平 う、それもそうじゃな。うえっへん。さらば、そなたがまことにわかっておるか、まろが聞いて進ぜよう。この歌の意味を、ちゃちゃっと言うてみよ。

春菜、こっそり嘲笑しつつ、

春菜 はいはい。『梅の香を漂わせて、鐘が五つ鳴るときに、松の木の下でお待ちしております』という恋文じゃないですかあ。

平平 うむ。梅の香、五つの鐘、松の木の下じゃな。

春菜 そして、そのあとには、お読みになったらそのしるしに、梅の枝をお返しください、って書いてますよ。

平平 おお、そうか。春菜、お前はほんまにええ子じゃのう。そんならついでじゃ。誰にも言わず、この枝を梅が枝に届けてくれ。そのかわり、あの小舎人のこせがれと何をしようとそなたの勝手。

春菜、喜んで拍手して、そのあと、お小遣いをせびるように手を出す。

平平 しっかりしとるの (しぶしぶ小遣いを渡す)。

春菜 あっざ～す。じゃあ、すぐにお届けしてきます。

春菜、飛ぶように去る。

(第五場)

平平 (ため息をつきながら) まったく、どいつもこいつも・・・。(次のせりふ、57577で少しずつ切りながら) さてわしも ぐずぐずしては おられぬぞ 一杯飲んだら 松の木の下。ん？ 今のは和歌になっておる。いやあ、色男はつらいのお。ははは (笑いながら退場)。

義太夫 と、鉄より固い面の皮。胸に一物。下つ方、

思いやる気もあらばこそ。宴の座にぞ入りにける。
(第六場) 夕暮れの橘の上の居室。

オケ Dove sono i bei momenti 演奏。

橘の上、鬱屈した様子で登場。甘美な喜びの時間が去り、夫の心変わりを嘆きつつ、幸せな日々の思い出が今なお胸に残ることを確かめる。そして、その思いが夫の心を変えることができないだろうか、とかすかな希望を抱く。以上のような思いを音楽に乗せて舞う。

笛 愛と赦しのテーマ 演奏

橘の上 美しき昨日の花は今日の夢。

義太夫 日影待つ間の朝顔や。あら嘆かわし、わが夫の誓いし言のくさぐさの消えて玉散る白露か。

橘の上 もしまた夫の僻心、正す望みのあるならば我は何をやいたすべき。

橘の上のせりふの途中、家路と梅が枝登場。橘の上の様子を見て案じている。橘の上、上手向きにうづくまるような姿勢になる。

春菜登場。

(第七場)

春菜 梅が枝様。お殿様からのお届け物でございます。

梅の枝を渡す。家路と梅が枝はうなずき合う。

梅が枝 誰にも言ってはいませんね。

春菜 口と懐は堅いですから。

家路 「軽い」の間違いであろう。しかしそなた、いつの間にお殿様の小間使いまですようになったのじゃ。

春菜 力のある人なんて、ホイホイおだてて恐れ入ってるふりをして、そのおこぼれをもらうのが正しい生き方。気に入らないときは後ろを向いて舌を出しとけばいいだけよ。そんなこと私は十五歳で悟ったわ。家路様のように夢ばかり追う男は出世もしないし楽しみもない。浮気のひとつもできないから梅が枝様はさぞご安心。

家路 生意気なおしゃべりめ。つべこべ言わずにとつと樋殿の御用を済ませて来い。

春菜 はいはい。そうしてそのあとは、光丸様と舟蔵で逢う約束。ああ、この世は天国。

春菜、退場。家路は不機嫌になるが、梅が枝にたしなめられ、気を取り直す。家路と梅が枝、橘の上の部屋に入る

(第八場)

梅が枝 奥方様。(橘の上は気づいて向き直る。梅の枝を見せて) ただいまこれが戻ってまいりました。

橘の上 さらばわれらの企ては。

家路 すべて整いましてござります。まずは宴の席に着き、わたくしが酔ったふりをして横になり、梅が枝が座をはずせば、お殿様も立たれましよう。その隙に奥方様が梅の香りを身にまとわれて、松の木の下においでになれば闇の中ではお殿様もお気づきにはなりません。そしてまた、梅が枝にはあなた様の橘の香りをお借りして、ひと芝居。さあ、そろそろ参りましよう。

橘の上、憂鬱そうに退場。家路、梅が枝は幸福と不安の複雑な思いで後に続く。

オケ Amanti costanti 演奏。

(第九場) 夜の庭。(鐘の音)

オケ L'ho perduta 演奏。

春菜、闇の中を手探りで歩いている様子。やっ

と舟蔵の戸を見つけ、その中に入っていく。橘の上と梅が枝が登場。ひそひそ話す様子。梅が枝は退場。橘の上が扇を持って一人たたずんでいるところに光丸登場。やはり手さぐりしている。

光丸 さあ、今夜はまた春菜と逢う約束。お池に浮かべる舟の蔵で、とやうていたが、このあたりであろうな。おや、梅の香りがする。あそこに女がいる。ということは梅が枝様に違いない。春菜に逢う前に大人の女も悪くない。(橘の上に近寄って) 梅が枝様。そうですよね。宴から抜け出して、寒くはございませんか。僕が抱いてあげましよう。(抱き付くが、橘の上は扇で顔を隠しつつ振りほどこうとする) そんなにいやがることはないでしょう。肌を寄せて温まりましよう。

光丸、さかんに橘の上を抱きしめようとする。

平平、手さぐりしながら登場。

(第十場)

平平 松の木の 下というのは このあたりかわいい女に そろそろ逢える。おっとまた和歌になった。絶好調じゃ。それ、梅の香りが漂うてきた。近いぞ、近いぞ。なんじゃあれは。

光丸 梅が枝様。春菜から聞きましたよ。今からお殿様とお楽しみになるのでしょうか。それならその前に少しだけ僕にも分け前をくださいませ。

平平 あの声は小舎人童。またしても邪魔しおつて。(近づいて大声で) こせがれめ。貴様のような奴はこうしてくれる。

平平、光丸の首根っこをとらえて、突き飛ばす。光丸が転ぶと、ちょうどそこは舟蔵の入り口。

光丸はあわててその中に入る。

(第十一場)

平平 それ見たことか。追いかけてぶちのめしてやりたいが、今はそれより大事なことがある。エヘン。梅が枝や。怖かったであろう。震えておるな。もはや案ずることはない。さ、その手をわしに。(手を取って)なんとみずみずしい手であろう。橘の上とは大きな違い。(小さな袋を取り出して)この黄金はそなたの持参金。それからこっちは、かぐや姫ですら手に入れがたい金剛石という宝物。これをお前にやるからは、これから先も逢うてくれるな。そうか、そうか、よしよし。

平平の話の途中で家路登場。

(第十二場)

家路 梅が枝はおらぬか。宴のさなかにどこへ行った。

平平 あの声は家路か。梅が枝、そなたしばらくこの近くに隠れておれ。

三味線、暗闇のメリヤス。

平平と家路、ぶつかりそうになりながら、すれ違う。平平は舟蔵の近くでうずくまり、橘の上は離れた位置に潜む。家路は梅が枝を探す様子。

梅が枝登場。平平は様子をうかがっている。

(第十三場)

家路 この橘の香りは、奥方様。

梅が枝 そこにいやるは家路か。こんなところで何をしている。

家路 宴の途中で梅が枝の姿が消えまして。

梅が枝 それはさだめて、平平殿とどこかで逢引きしているのであろう。

家路 なんですと。婚礼のさなかに、お殿様とはいえ、別の男と。あの女め。赦せぬぞ。

梅が枝 わたくしも平平殿を赦せませぬ。どうじゃな、家路。赦せぬ者同士、仲良く致さぬか。

家路 奥方様。それは誠のおぼしめしでござりますか。わたくしもかねてよりあなた様をお慕い申しておりました。

梅が枝 家路。

家路と梅が枝、大げさに抱き合う。平平は怒り心頭に発して立ち上がる。

家路 奥方様、さらばあの舟蔵の内にて。

梅が枝 うれしいぞよ。

家路、梅が枝の手を取り、梅が枝を舟蔵の中に入れる。

平平が背後から家路をとらえ、地面に叩きつけるように突き飛ばす。

義太夫 と、言うて梅が枝、舟蔵に入るあと家路続かんとする襟首をひっ捕らえ、情け容赦も荒々

しくたたきつけたる平平は、

平平 やあ裏切り者め、首討ってやる、それへなおい。

家路 お殿様。命運尽きたか、南無三宝。

平平 誰かある。松明を持って、家路を取り押さえよ。

ツメ人形が松明を持って登場し、家路を照らす。

平平が舟蔵の中に手を入れて、引っ張り出すと、光丸、春菜、梅が枝の順に登場。梅が枝は扇で顔を隠している。

平平 さあ、もう一人、赦しがたきは舟蔵の中。やあれ、不義者、覚悟せよ。

義太夫 と、引きずり出せば小舎人童。あとに続いて樋洗春菜。

平平 しからばこいつ

義太夫 と引く袖の香りはたしかに花橘。

平平 不実な女じゃ、不義者じゃ。

梅が枝 お殿様。なにとぞお赦しくござりませ。

平平 ならぬ。

家路 お赦しくござりませ。

平平 ならぬ。

光丸 お赦しなされて。

家路・梅が枝・光丸・春菜 ござりませ。

平平 ならぬと言うたら、ならぬわい。ムハハハハハハ(大笑い)。

義太夫 と、権柄ずくの出放題。皆々その場にひれ伏して、うち沈みたる折しもあれ、そよと吹いたる春風に闇もあやなく漂うは、ラーヘンデルのその香り。

橘の上、香油の瓶を持って登場。

(第十五場)

橘の上 さらばわらわがお赦しを乞わばいかにぞ、いかにぞや。

ツメ人形が橘の上を照らす。

平平 そ、そ、そなたは橘の上でないか。すりゃこっちは。(ツメ人形、梅が枝を照らす)梅が枝、か。

そうか、そうであったか。わしの心を試そうと皆がひとつの心になって…。さらばわしこそそなたに願う。赦してくだされ、橘殿。

三味線 橘の上の、本当に赦すべきか否かの心の迷いの旋律

笛 愛と赦しのテーマ

橘の上 まそ鏡 磨ぎし心の 澄みぬれば ねもころ 我は 赦さざらめや

平平以外、顔を見合わせてうなずき合い、安堵の表情。平平はわけがわからずきよろきよろして

いる

平平 春菜、ちょっと、ちょっと来い。(ひそひそと) 今の歌はどういう意味じゃ。

春菜 お赦し申します、とおっしゃいました。

平平 そうか、そうじゃったか。ありがたい、ありがたい。そんならこれで皆が満足。今宵は晴れて三日夜の祝い。家路梅が枝、めでたいなあ。

家路 ありがとう存じます。したがまあ、何とも狂おしい一日でござりましたなあ。

梅が枝 そして、この狂おしさを終わらせるのは。

光丸 お殿様の。

家路・梅が枝・光丸・春菜 お慈悲にござりまする。

平平 いや、そうでない。それ、橘の上を見よ。嘆くばかりのか弱い妻と思うておったが、たった一日のうちに、いともまばゆい、女神のようになられたでないか。この一日はわれらにとって千秋万歳。このもやくやを終わらせるのは、「愛」と「赦し」じゃ。

家路 愛と。

家路・梅が枝・光丸・春菜 赦し！

梅が枝 お殿様。奥方様のお持ちになるラーヘンデルの花言葉は「赦し合う愛」でございます。

平平 うむ。さあ、皆のもの。かくなる上は無礼講。かごたいまつに火を入れて、飲めや歌え。喜びありや、喜びありや。

全員、歓喜の表情。

オケ Questo giorno di tormenti 演奏

曲に乗って、光丸と春菜はスキップを踏むように、家路は恥ずかしそうにする梅が枝の手を取って満足げに、そのあとに平平が胸を張って退場しようとするが、橘の上に気づいて丁寧な道を譲り、ツメ人形が足もとを照らして橘の上が退場、最後に平平が退場。

曲が終わると、笛、舞台の中央に出て、立ちながら愛と赦しのテーマ

終わると、振り向いてオケに起立を求める。

参考文献

ボオマルシエ作 辰野隆訳『フィガロの結婚』1952. 岩波文庫

Lorenzo Da ponte 『LE NOZZE DI FIGARO』(海老沢敏『モーツァルト全集』13「オペラ3」1992.小学館)

水林章『モーツァルト《フィガロの結婚》読解 暗闇の中の共和国』2007.みすず書房

Karl Böhm指揮 DVD 『LE NOZZE DI FIGARO』
2007.NHKエンタープライズ

Jean-Pierre Ponnelle監督 Karl Böhm指揮 DVD
『LE NOZZE DI FIGARO』2009.ユニバーサル
ミュージック クラシック

オイレンブルクスコア 『LE NOZZE DI FIGARO』
2012.Eulenburg Edition

【追記】

狂言風オペラ「フィガロの結婚」は、2023年3月に三度目の上演の予定

3月10日 大阪・大槻能楽堂

3月12日 東京・観世能楽堂

